氏　　名	吉本　尚
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	博乙第　　２８５２　　号
学位授与年月	平成　２９年　１２月　３１日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	大学生の危険な飲酒における現状、危険な飲酒とアルコール関連外傷との関係および飲酒量の自己認識との関係
主　　査	筑波大学教授　　博士（医学）　井上　貴昭
副　　査	筑波大学准教授　博士（医学）　鈴木　英雄
副　　査	筑波大学准教授　博士（医学）　根本　清貴
副　　査	筑波大学准教授　博士（医学）　森田　展彰

論文の内容の要旨

吉本尚氏の博士学位論文は、大学生の危険な飲酒における現状、危険な飲酒とアルコール関連外傷との関係および飲酒量の自己認識との関係を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

（背景）

過剰なアルコール摂取についての先行研究では、大学生の飲酒習慣には成人で見られない、１）ビンジ飲酒が多くみられること、２）アルコール摂取量と外傷などによる死亡との関係はリニアな関係であること、といった特徴が明らかになっている。

（目的）

本論文では著者は、ビンジ飲酒を含めた日本の大学生の飲酒状況を調査し、過剰なアルコール摂取とアルコール関連外傷との関連を明らかにし、また過剰なアルコール摂取と自身の飲酒量の自己認識との関連を明らかにするため、１つの横断研究を行っている。

（方法）

著者の取ったデザインは無記名の自己記入式質問紙法による横断研究である。三重県にある３大学で、

定期健康診断を 2013 年 1 月から 3 月までに受診した 20 歳以上の大学生、大学院生を対象とした。本研究では過剰なアルコール摂取を、過剰な週飲酒量（男性週 140g 以上、女性週 70g 以上）およびビンジ飲酒（2 時間で男性 50g 以上、女性 40g 以上）の 2 つで定義している。質問項目は、1) 飲酒頻度、2) 1 回飲酒量、3) 過去 1 年間のビンジ飲酒歴、4) 過去 1 年間のアルコール関連外傷歴、5) 飲酒量の自己認識、6) 性別、年齢などの統計学的情報について聴取している。著者は 3 つの解析を行った。解析１は、記述統計ならびに、男女の違いを明らかにするため、飲酒者、週過剰飲酒、ビンジ飲酒に関して男女に分けて正規分布の場合には t 検定を、そうでない場合には Mann- Whitney の U 検定を行った。解析 2 として、過剰なアルコール摂取とアルコール関連外傷との関連を明らかにするため、年齢、性別を調整してロジスティック回帰分析を行ったものである。解析 3 として、過剰なアルコール摂取と自己認識との関連を明らかにするため、性別で層別化したのち、年齢を調整してロジスティック回帰分析を行った。

（結果）

2,842 人の学生が期間中に健康診断を受診した。結果 1 として、性別、年齢についての質問に回答した 2,280 人（80.2%）が対象となった。過剰な週飲酒量者は 185 人（8.4%）、ビンジ飲酒者は 1,159 人（52.8%）であった。男女で比較した結果、飲酒頻度（p<0.001）、1 回飲酒量（p=0.001）、週飲酒が過剰な者の割合（p=0.028）、ビンジ飲酒者の割合（p<0.001）は男性が有意に多くみられた。

結果 2 として、過去 1 年間の外傷歴についての質問に回答した 2,177 人（76.6%）を対象とした。過剰な週飲酒量者は 181 人（8.3%）、ビンジ飲酒者は 1,151 人（52.9%）となった。107 人（4.9%）が過去 1 年間にアルコール関連外傷を経験した。ロジスティック回帰分析の結果、ビンジ飲酒（オッズ比 25.6【8.05-81.4】）と週過剰飲酒（オッズ比 3.83【2.41-6.09】）の両方が有意にアルコール関連外傷と関連していた。

結果 3 として、自己認識に関しての質問に回答した 2,093 人（73.6%）を対象とした。150 人（81.5%）の過剰な週飲酒量者と 1,032 人（89.3%）のビンジ飲酒者は自身の飲酒を正常と誤認していた。ロジスティック回帰分析の結果、男性で週飲酒量が過剰な者は自身の飲酒を異常と有意に認識していた（オッズ比 2.68【1.56-4.61】）が、男性のビンジ飲酒者（オッズ比 1.11【0.75-1.64】）、女性で週飲酒量が過剰な者（オッズ比 1.93【0.98-3.81】）、女性のビンジ飲酒者（オッズ比 1.20【0.72-2.02】）の認識には有意な差がなかったことを著者は明らかにした。

（考察）

著者はビンジ飲酒を含めた日本の大学生の飲酒状況、過剰なアルコール摂取と外傷との関連、過剰なアルコール摂取と自身の飲酒量の自己認識との関連を明らかにしている。先行研究と同様に大学生にはビンジ飲酒が多く、過剰なアルコール摂取はアルコール関連外傷と関係が見られ、特にビンジ飲酒はアルコール関連外傷と大きな関係が認められている。しかしながら、自身のビンジ飲酒を行う男女、および週飲酒量が過剰な女性は自身の飲酒量を正常と誤認していた。先行研究では、適切な飲酒量を知識として伝えることで、過剰な飲酒量が適切になるということが知られており、適切な飲酒量を知識として伝えることが必要と著者は提案している。最後に、一般化、因果関係の点で制限が見られ、さらなる調査が必要であると限界を述べている。

（結論）

著者は大学生における過剰なアルコール摂取の大半はビンジ飲酒であったことを明らかにした。過剰なアルコール摂取はアルコール関連外傷と関係が見られたが、特にビンジ飲酒はアルコール関連外傷と大きな関係が認められており、ビンジ飲酒対策が必要であることが結果から示唆されている。ビンジ飲酒を行う男女、および週飲酒量が過剰な女性は自身の飲酒量を正常と誤認しており、効果的なアルコール教育が必須であると結論づけた。

審査の結果の要旨

（批評）

本研究は若年者の死亡原因の上位を占めるアルコール過剰摂取について、本邦の大学生を対象として日本で多いとされるビンジ飲酒の実態を明らかにし、過剰アルコール摂取とアルコール関連外傷の関連性、及び大学生の飲酒量に関する自己認識について検討した調査研究である。本邦に特有の“飲み放題”システムとビンジ飲酒の関係、ビンジ飲酒時のアルコール摂取量に関する自己認識の低さ及び男女差など、現在の本邦大学生におけるアルコール摂取に関する新たな問題点に着目され、本研究は社会的問題として警鐘を与えた上でも極めて重要な知見に富む。今後大学生に対するアルコール摂取に関する教育や、“飲み放題”システムに対して教育・啓蒙活動を行う根拠となるべき、重要な研究報告であると考える。

平成 29 年 10 月 10 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、学力の確認を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。